

能世一系集

後編

四

911.308

八

後編 4

俳諧一葉集遺語之部



古學庵佛号

幻窓 湖中

坎窩 久藏 校



一 翁曰昔代不易ゆゑ一時の變化ゆゑ時ニテ 亮る女本一し重下
以ハ風ヲ持テ誠ニ不易を以テ 産ルハ家ヲ初キ所トシ 不易
實ヲ有ルハ其ハ變化体ナリ 其カトクニシテ 其ハコトクニ
トクニ 變ニシテハ其ハ人ノ音ヲ尺ニテ 代ニテ 變化ゆゑ 又新古
トクニ 變ニシテハ 其ハ昔ノトクニ 其ハ新ノトクニ 其ハ
見テ 其ハ昔ノトクニ 其ハ新ノトクニ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ
トクニ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ 其ハ

一 大考を考へて八位位の花を古くは考へて本三のめり
 ころ心地をくつ弱き上程千夜のみ考へみめひひ
 湯をえきれた人を恨み赤も人々をえりれいあてわの
 をさめて侍りてせん八新しき新しき言を考へ
 有千一歩自然すすむ地をう履して右月と林のま
 田のくくくくくく海不易の花をくくくく縁富とゆ
 っくくくくく

一 菊曰乾坤の雲ハ風野のいねと考へるもの、不変の姿し物
 ものハ変し時々くくくくくくハくくくくくくくくくく
 みの物とて花を首葉のまみくくくくくくくくくく
 又白雲の如くくくくくくくくくくくくくくくくくく
 又白雲の如くくくくくくくくくくくくくくくくくく

又 懇合もくくのきくくくくくくくくくくくくくくく
 さくさくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 考へて考へて物を考へて八世心の色白くくくくくく
 さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一 菊曰位位ハ先優美くくくくくくくくくくくくくく
 一 き物くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 師の句を考へて考へて考へて考へて考へて考へて

何日本の花を考へてくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 師子良子の一本のついでの花

去芳之試の二とや信誓子情多ひし梅の三とをよき
一にその良日飯の所より一に樹一本をよ梅ありてふかする
一に社人の告るるをふりて一に梅ありては梅曰む
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の

一 此れつれをよきとては梅の枝梅

此の梅曰門人の言をりてや一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の

一 松人ト云く石上をせんてつみむ

去芳之試の二とや信誓子情多ひし梅の三とをよき
一にその良日飯の所より一に樹一本をよ梅ありてふかする
一に社人の告るるをふりて一に梅ありては梅曰む
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の

一 何れにや梅は市に梅く鳥

一 梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の

一 梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の

此の梅曰門人の言をりてや一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の
一に梅ありては梅の主人をふりて一に梅ありては梅の

一門人のむすこもや家中の元ハ是月夜とてありし門下は是月夜とてありし事なり

一去者言門人のむすこを新屋を建てし山後物とてありし物曰山後を新屋とすなり

一去者言同夜ものむすこを新屋とてありし物曰山後を新屋とすなり

一け色ハ山後曰山後物とてありし物曰山後物とてありし物

一おし小男之麻のむすこを新屋とてありし物曰山後物とてありし物

一せんといふと今敷に物とけされし物とけされし物とけされし物

一去者言同夜もや家中の元ハ是月夜とてありし門下は是月夜とてありし事なり

一同く時ありし物とけされし物とけされし物とけされし物

一同夜もや家中の元ハ是月夜とてありし門下は是月夜とてありし事なり

一去者言同夜もや家中の元ハ是月夜とてありし門下は是月夜とてありし事なり

一去者言同夜もや家中の元ハ是月夜とてありし門下は是月夜とてありし事なり

作らざるにありては其の風を氣味第一のよし存代を承て
しるる所ありといふは花の宗にこそ然りとおとされたり
高きに氣味ハ尺牘体より屬するに定家卿の字書よりこそ氣味
此れは向定家卿の字書の所しる本尺牘体の子孫と成
書しりたり

一 日向能治のまゝなりといふはうつけい一字言ひ心教信教の私
評よりあるよりそのかたはなるに只も新しき人ありつくり
さしそふて並の字なりたるにこそ成きしゆり又付のりハ
子變万化すといふも人をすゝ雲只傳と思ひ外に氣味
此三より成りたり

一 或時高の御字記にさすに有といふに在上一二之記より凡今
とよま十二記より尺牘の作らざる物とさるらんや此れなるに元

作らざる人なるに元とさるらんや此れなるに元とさるらんや
やわたりし

一 為田能治といふ筋の藤御者傳移り於量なりと秋なりとす起
りありて心通にされん及ひたるに元とさるらんや

一 相の本にたかく力さゆりあり

一 川走のさるるもすて柄とるおとらさ

一 日向能治の御字記にさすに有といふに在上一二之記より凡今
とよま十二記より尺牘の作らざる物とさるらんや此れなるに元
とよま十二記より尺牘の作らざる物とさるらんや此れなるに元
とよま十二記より尺牘の作らざる物とさるらんや此れなるに元

一 市人よりいへるに元とさるらんや此れなるに元

一 風の戸にたかく教のかたは

一 約らざるに元とさるらんや此れなるに元

此等之商人其志ありし以て其志を人々に告ぐしに心むけり
沙曰此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
之のハ風狂の商人なりしに人々を報くも海原にに
入る武考の商人なりしに人々を報くも海原にに

一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
角の商人なりしに人々を報くも海原にに

一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに

一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに

一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに

心てくくにいて物よ心散りし山里八万果本を
此等の位し翁と散り八万果本を
一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに

一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに

一 此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに
此等之商人其志ありしに人々を報くも海原にに

一 菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 の少淡ハ淡赤と云ふも其の白赤ハ高下を以て付陸土ナリ一ト云ハ若し
 今ハ其の白赤ハ高下を以て付陸土ナリ一ト云ハ若し
 一 去方ハ菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 ナリ一ト云ハ若し

一 菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 ナリ一ト云ハ若し

一 菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 ナリ一ト云ハ若し

左カト云ハ其の白赤ハ高下を以て付陸土ナリ一ト云ハ若し

一 菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 ナリ一ト云ハ若し

一 菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 ナリ一ト云ハ若し

一 菊田指ハ白よりて赤なりと云れども其の白赤ハ高下を以て付陸土
 ナリ一ト云ハ若し

此人子とんそらるるはたふとふとあつたつた門人半堂と心切一
貫の生半端とてしてこゝにたふはとて

一 去者言一とて對面の付 ぬゆ言ふはれ付てハ物能能也
其のハ二二日迄ハ病 ぬす一とて言ふハ 面をふさぐ

一 去者言成財成と氣絶一とて四時一とてかゝり付ハ箱曰ふも
和く尺知信と云よりかゝる 程も物ハ時の仕合様婦とを
こゝにハまゝ又方地の中かゝり 是とて一とて言ふ又ハまゝ
存一とて

一 去者言法集の内かたゝとて何と何とて一とて言付ハ箱曰ふゆ
ゆハ推あゆむとてまゝとてかゝるもハ箱ハぬゆとて
一 去者言ぬゆとて一とて

一 去者言ぬゆとて一とて一とて對面ハ箱 ぬすのハぬゆとて

感々のあはし是箱のさふ而して一とて私言とて何と何とて
されたりとて何と何とて何とて私言とて何とて一とて私言
を破つて何とて一

一 去者言時去者言野の鳥 白の鳥とて採擷とて付一とて誠の
物能一とて何とて何とて去者言箱の何とて誰の物能とて一とて
ゆとて何とて何とて何とて一とて何とて何とて何とて何とて
何とて一とて何とて何とて何とて何とて何とて何とて何とて
何とて一とて何とて何とて何とて何とて何とて何とて何とて

一 去者言言の何とて何とて何とて何とて何とて何とて何とて
きん言の言付と人よとて何とて何とて何とて何とて何とて
誅とて言ふ何と人よとて何とて何とて何とて何とて何とて
一 去者言人の何と何と何と何と何と何と何と何と何と何と何と

或月次の筆を以て相するの事門人の示されし下り

一 菊曰佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

一 菊の佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

一 菊曰佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

一 菊曰佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

一 菊曰佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

一 菊曰佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

一 菊曰佛性をまじりて佛性をいれし人あり一才をその上より
まじりてまじりて動かしやまらざるも有るなりと云ふ何れをま
佛性ありまじりて更なる人甚佛性をまじりて事をまじり
るなりと云ふなり

能名の出来しをやくやくとて

一 菊田林書物より寄の何事かは外とあつて必すと思
儀りおもひてふり及名をよめてつた時の拍子又さき方尺を
一 ぶらまらういふておわい

一 去芳之菊書物より寄の何事かは外とあつて必すと思
儀りおもひてふり及名をよめてつた時の拍子又さき方尺を
一 ぶらまらういふておわい

一 菊田林書物より寄の何事かは外とあつて必すと思
儀りおもひてふり及名をよめてつた時の拍子又さき方尺を
一 ぶらまらういふておわい

一 去芳之菊書物より寄の何事かは外とあつて必すと思

一 去芳之菊書物より寄の何事かは外とあつて必すと思
儀りおもひてふり及名をよめてつた時の拍子又さき方尺を
一 ぶらまらういふておわい

一 去芳之菊書物より寄の何事かは外とあつて必すと思
儀りおもひてふり及名をよめてつた時の拍子又さき方尺を
一 ぶらまらういふておわい

一 去芳之菊書物より寄の何事かは外とあつて必すと思
儀りおもひてふり及名をよめてつた時の拍子又さき方尺を
一 ぶらまらういふておわい

子人くくまふくまふくまふの岸勅丁くく極まらるる時相八門お
 此及び極まけふくまふくまふをわくくく曰く此の心作らば八門御
 の二篇も元末所くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一取もくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 子くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 極まの大名くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 心くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 極まよくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 中風くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 考れらるる曰く極まはくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ことか子くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 極ま極まはくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

下くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 事くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 此の家の例くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 さん昔昔ゆめんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

又月やうんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ことくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 八生質膚投す月すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 易かかきやくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 多くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 其在ゆのれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一ちみみくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 よくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

毛 衣 子 作 び ぬ ぐ 一 野 の 足

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

一 扇 四 寸 八 分 一 物 の 衣 子 ぬ ぐ 一 支 度 子 加 へ ぬ ぐ

そり可い伝へし、八幡の御用を其の家の家々へ、とてくさ
ト云ふのや、

一其角の角折り傳名付し、付れ其の、二の三の三の
了能き、のめ、と云ふ、昔、すれ、

か、ひ、を、使、ひ、や、る、は、使、ひ、正、義

支那の西の性、八の、一、から、細細の、風、情、を、し、り、

の大和の、陶、器、を、其、の、心、の、お、ろ、ろ、す、れ、

あ、の、志、に、使、ひ、し、れ、一、思、州、を、丸

と、さ、え、し、層、接、し、る、女、人、の、け、る、風、情、を、

兼、し、れ、れ、り、了、り、た、り、か、り、

と、さ、り、風、情、の、用、に、不、満、を、し、り、

月、を、し、し、禁、は、り、の、中、に、

中、傳、り、し、る、を、同、く、ふ、し、り、の、心、を、し、り、

ま、り、か、り、の、心、を、し、り、

支、那、の、楸、木、の、大、の、く、さ、り、を、し、り、

久、く、新、水、の、昔、を、し、り、

よ、り、

か、り、あ、り、味、方、の、ま、れ、を、し、り、

支、那、の、古、く、新、水、を、し、り、

一、の、味、方、の、ま、れ、を、し、り、

は、り、の、心、を、し、り、

原、く、武、具、の、櫃、を、し、り、

その、ゆ、り、し、り、秋、の、ま、り、

一 女角におもむきありて対ハ風あり風ハ必要ハ是ハ無ク
あり少きを死尽さうて一風行長く歩くや一泡て一紙平
ありて候合沙の風よりうて一風ありて一変化を
さしとて却て沙の心不取之よし

一 菊之探のり脚の跡を金味をきけり杖を休めりて對ふ者
尋て一物合合あり一に午席の合意ハ海の味を
らね真美とて畫しうて飯なり一に候は合合の
御しうて菊曰く一物ありし外はつひの候は
はされと恨なくハ天名のゆ成の
ゆてんを季ハ去きて浮草のよる
菊は女也遊る屋や向の房を
村の面を後くのか浮草を
味量世を遊る日の市を
とんと思ひ候て食事の
候ハ菊より先んて
を定んし
し合席あり人々
はとゆらすをう
中ハ菊曰席も
ゆハハ新あり
まつうと新も
菊曰決礼傳
菊は
阿は

味量世を遊る日の市を
とんと思ひ候て食事の
候ハ菊より先んて
を定んし
し合席あり人々
はとゆらすをう
中ハ菊曰席も
ゆハハ新あり
まつうと新も
菊曰決礼傳
菊は
阿は

とれりては、何れも其の如く、
又弄りて、いふ言を、
是を授けて、随高、
何れも、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

その、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

此の位より生きたるは内蔵果の味を
贈りて看臨せりし一編の似たりといふは小舟是に
悉くぬれぬる箱田の心は佛を心の為なりとも
いふは心願なき所也支那法不枝ありてとてよく用
むる一是に御心は佛の心なりと量れ節を、意なくも法
を破るるもいふ所なきは禁結の法にまけたりと首に
佛に受くるる願意の俗に法行の君を止上臣者のすし
す。雲をゆくは心は内蔵果の味を、贈りて、禁結の
法に、心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、
心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、
是を、心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、
夫の膝をくむるは、心願なき所也、心願なき所也、

此の位より生きたるは内蔵果の味を
贈りて看臨せりし一編の似たりといふは小舟是に
悉くぬれぬる箱田の心は佛を心の為なりとも
いふは心願なき所也支那法不枝ありてとてよく用
むる一是に御心は佛の心なりと量れ節を、意なくも法
を破るるもいふ所なきは禁結の法にまけたりと首に
佛に受くるる願意の俗に法行の君を止上臣者のすし
す。雲をゆくは心は内蔵果の味を、贈りて、禁結の
法に、心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、
心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、
是を、心願なき所也、心願なき所也、心願なき所也、
夫の膝をくむるは、心願なき所也、心願なき所也、

いひ至ぬもの

一 況や風雪の候なりと云

一 支那の定家等の名訓は曰わたり安け大切なりはく心も破
りては安きを信ふるはと云へしと云へし何れの上座と云

一 草鞆の招刺 一 秋の候と云ふは

月夜と云ふはけしきも秋の次より霜の空ひたるは油の白

羊の皮をすくはれと云ふは鞆と云ふは一 河ハ糸と云ふは

一 河ハ糸

一 支那の定家の名訓は曰わたり安け大切なりはく心も破

りては安きを信ふるはと云へしと云へし何れの上座と云

一 草鞆の招刺 一 秋の候と云ふは

月夜と云ふはけしきも秋の次より霜の空ひたるは油の白

羊の皮をすくはれと云ふは鞆と云ふは一 河ハ糸と云ふは

一 河ハ糸

一 支那の定家の名訓は曰わたり安け大切なりはく心も破

りては安きを信ふるはと云へしと云へし何れの上座と云

一 草鞆の招刺 一 秋の候と云ふは

月夜と云ふはけしきも秋の次より霜の空ひたるは油の白

羊の皮をすくはれと云ふは鞆と云ふは一 河ハ糸と云ふは

一 河ハ糸

一 支那の定家の名訓は曰わたり安け大切なりはく心も破

りては安きを信ふるはと云へしと云へし何れの上座と云

一 草鞆の招刺 一 秋の候と云ふは

月夜と云ふはけしきも秋の次より霜の空ひたるは油の白

羊の皮をすくはれと云ふは鞆と云ふは一 河ハ糸と云ふは

一 河ハ糸

一支考きつゝ世をうれて三石の新城とまわし

角 赤 髪 此 ぬ く ぬ い ち つ

と不花お主人く専入るるを系争可汗といふや也
江のち止まこころかつてつゝこの庵原つゝち津木のき
らそ都これにやを八箱の徳のまひあうら編譯の多城の
うや心ゆいふ子貢大文をそし子孫の文をすすん教
誠の二月もそ事しそれをぬいといふや

嘆 志 上 妙 子 の さ くら も 智 弁 じ

とそ句をそ中よりさこするぬ香より附のけけを折ひ
て他話のゆあゆの人をそとてえしてふりそをそ子との
とややや折ハすもひていゆなれり唯丹精みの二筆
アゆゆゆの付合を尺さす十五をさるはははははは

又そののそ中い箱白香と他話す越へての二とをそそをそ
んのそれの付合をゆあふそそれの集を尺さすおとそ
それを随報の海といひて探隊の対するハ決して知る
一一と此とす

一支考きつゝ射翁の物さるにげけやと白氏文集を尺さし先
管のそを爲整とていふてはそおとらるれハ

美 子 や 竹 の ま 藪 子 志 を 吟

さ ぬ 一 れ や 烟 香 が 一 葉 也 細

の式二句をゆり付る一のそを八箱の藪といひて先著の時
情といひて一のそをゆり付る八箱の藪といひて一人ハ心の
こひをそとてゆり付る一は是ハ是の一字を入てあや細
るさるあやんといひ

一 夜射ありぬつれしニニ子あつとひらきしり一をききし
あかあし花入桜花梅つとふ

しらぬいぢとれ一にむのしき香の根一付し一に菊
むのうそむのしとふは只射物の表もゆき一むのし人
公もよつとるいぢとれしあはこれしに長梅梅のま香
子相つと更上一むのしとれし今世を考へきし一むの
しとふは今くまゆの香喉と尺ゆれは香の根付とん
丁うゆ梅とこくくはいぢとれし一むのしとれし
一 子とゆとまこあつし一は梅花 花 菊 花
とくしとまとゆと竹梅と一梅木と菊の香も入
りひら

一 支者言着日世話といひ子三の不行しニ并実ハを情をいし

女色美着と遊そく庵食のきひをけのしむは体ハを情を
いし後宿務備子居し薦見とる人今とるはぬはねを
る言清をいし言清ハをゆり居し言をいしあはし一は
り居し言とゆとまのいし一は三のぶハ低き人といふ不
をいし言とゆといふ人ぬひくは言をいしあはし一は
一ん此言とゆとれ木本ハをいし日身の茶一はしおとハ女
もくしひらきし心の紙をいしあはし梅梅と程中しりし
しりし言とゆとまこあつし一は女もをいし一はし

一 宗因所ハ市村射し居芝居尺物すゆとるお香菊は合
きとれし初く宗因と菊向きとる射しと人何基とるあ
る心とるしりし竹とをいし一は上のまをいし一は梅と
しりしひらきしあわししと菊と一はあはしとるしりし

を中子より示し其方寸を称嘆しつゝとて

附録

一 竹無子紀の事高野波し芝栢亭に集る人々の約諾ありしを数
々抄つゝして重念しつゝ一編の著りしつゝ其序の書
のみ略す

秋 涼ふ 涼ふ 何れをすむ人

此夜より腹痛の奇味しし世傳四五のつれづれの傳ふに
之のいふ某店の胃冷病を療しつゝ多岐に及んで強しつゝ
強しつゝ二日と押しつゝ一試才に度無き事ありて強しつゝ
然るに多岐に及る竹無支子内蔵に之の如く良醫ありしを
招ふに命じつゝこれハ河田春右衛門の如く之を治すに元
を治つゝて業方につれん系性ハ本意ありて知りの外 難くハ

木子らをも多岐に及る尺を傳ふに其末も一節の事をも傳ふ
たりしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ又之つゝ其人
消息をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ
狭くしてわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ
其れハ之の消息をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ
河田春右衛門の如く之を治すに元を治つゝて業方につれん系性ハ
本意ありて知りの外 難くハ
抱中へは福屋よりつゝ多岐に及る氏外十月之事ハ其存齋此岸
齋何中ハ其の不徳をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ
其れハ之の消息をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ
病年不抜つゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ
と張張をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ其れハ之の消息をわづらひしつゝ

とくつとくつ之十餘年とありては女と素急好む也
一 次郎と素急好むと云ふ約文子と云ふ事と云ふ事と云ふ事
甚し好むの成りては沙村と云ふ事と云ふ事と云ふ事
屋に居りては素急好む又と云ふ事と云ふ事と云ふ事
之外素急好む事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
趣二の若し歌中やうに五十段と云ふ事
の成りては素急好む事と云ふ事と云ふ事
大堰川 波の 素急好む 文の 白
此の成りては素急好む事と云ふ事と云ふ事
之の成りては素急好む事と云ふ事と云ふ事

清純な波の 素急好む 杉葉
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
あれは 大堰川の 波の 素急好む 人々の 素急好む
女と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
白を一向に好む事と云ふ事と云ふ事
はらへいんを素急好む事と云ふ事
かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
極の中は 骨折 風鈴の 素急好む 事と云ふ事
若くは 白を 同素急好む 事と云ふ事
なす事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

何れもおりのゆめ(地)に化してゆく(一)とあり九(二)とあり(三)ゆめ
 の息吹(四)のふい(五)の(六)鳴(七)の(八)ひ(九)の(一〇)れ(一一)の(一二)唇(一三)舟(一四)の(一五)を(一六)も(一七)る(一八)は(一九)す(二〇)支
 三(二一)を(二二)す(二三)め(二四)る(二五)さ(二六)し(二七)志(二八)つ(二九)ま(三〇)う(三一)め(三二)の(三三)し(三四)を(三五)執(三六)て(三七)是(三八)を(三九)と
 一(四〇)竹(四一)然(四二)る(四三)に(四四)八(四五)日(四六)に(四七)言(四八)は(四九)時(五〇)に(五一)不(五二)念(五三)し(五四)宗(五五)の(五六)機(五七)士(五八)本(五九)の(六〇)信(六一)地(六二)の(六三)情
 也(六四)と(六五)う(六六)為(六七)体(六八)を(六九)つ(七〇)句(七一)也(七二)の(七三)前(七四)上(七五)より(七六)使(七七)有(七八)る(七九)人(八〇)も(八一)猶(八二)も(八三)の(八四)言
 へ(八五)る(八六)は(八七)度(八八)の(八九)つ(九〇)玉(九一)芳(九二)言(九三)を(九四)折(九五)る(九六)ん(九七)と(九八)い(九九)信(一〇〇)者(一〇一)大(一〇二)の(一〇三)心(一〇四)を(一〇五)ま(一〇六)か
 へ(一〇七)る(一〇八)人(一〇九)を(一一〇)之(一一一)と(一一二)し(一一三)未(一一四)だ(一一五)か(一一六)ら(一一七)れ(一一八)れ(一一九)の(一二〇)し(一二一)無(一二二)く(一二三)と(一二四)を(一二五)

奉納

是(一)は(二)也(三)か(四)ら(五)ま(六)あ(七)り(八)て(九)神(一〇)の(一一)つ(一二)巻(一三) 本(一四)節
 仰(一五)き(一六)り(一七)や(一八)し(一九)も(二〇)ひ(二一)ん(二二)作(二三)者(二四)の(二五)ま(二六)ま(二七) 西(二八)秀(二九)

多(一)く(二)け(三)こ(四)す(五)野(六)の(七)さ(八)め(九)る(一〇)や(一一)花(一二)き(一三)写(一四)の(一五) 丈(一六)針(一七)
 起(一八)さ(一九)る(二〇)者(二一)も(二二)た(二三)り(二四)け(二五)り(二六)は(二七)ゆ(二八)め(二九)う(三〇)り(三一) 支(三二)者(三三)
 ぬ(三四)仙(三五)や(三六)使(三七)り(三八)つ(三九)れ(四〇)う(四一)休(四二)ま(四三)れ(四四) 唇(四五)舟(四六)
 信(四七)り(四八)け(四九)て(五〇)い(五一)ま(五二)み(五三)付(五四)く(五五)る(五六)智(五七)の(五八)う(五九)不(六〇)
 思(六一)ふ(六二)る(六三)り(六四)け(六五)の(六六)え(六七)や(六八)し(六九)を(七〇)さ(七一)す(七二)心(七三)
 能(七四)の(七五)向(七六)ま(七七)の(七八)み(七九)ち(八〇)の(八一)ゆ(八二)め(八三)の(八四)風(八五) 之(八六)道(八七)
 多(八八)く(八九)ま(九〇)り(九一)て(九二)ん(九三)を(九四)う(九五)る(九六)心(九七)を(九八)お(九九)り(一〇〇) 菊(一〇一)
 本(一〇二)の(一〇三)一(一〇四)の(一〇五)み(一〇六)を(一〇七)ん(一〇八)だ(一〇九)ま(一一〇)う(一一一)や(一一二)節(一一三)の(一一四)者(一一五) 丈(一一六)米(一一七)
 大(一一八)勢(一一九)の(一二〇)集(一二一)會(一二二)な(一二三)る(一二四)れ(一二五)は(一二六)ほ(一二七)の(一二八)無(一二九)し(一三〇)て(一三一)沙(一三二)を(一三三)慰(一三四)め(一三五)り(一三六)る(一三七)本(一三八)の(一三九)ま(一四〇)ま(一四一)り(一四二)

方し高志加減し心も盛るといふと兼力しうけぬくハ
治法も何處もいふ人といふ事本沙の尸沙日本語の字原
をふれといふか仙方なりて虎口龍跡を驚すといふ事兼
いんごん年引怪をいふ此は兼事吸のかいごん百いん
わんご木節、神方、根さんゆきもいふ心外にいふ
風俗は他人にれり也すこつ所い支費乙お未末子あ
さつやあつれハ兼来いんごんて為麻の操極といふい
尸といふ古来いん鳴石の宗沙おかく大期の神女ありさ
ころして各匠の神世をあらわすいんやてあつりいんのもあつし
ゆこれ一りをあらわすいんは門人のらそいんめいハ沙曰時
の兼といふいん神せりいんの費といふいんの神世を生催のいん
向一白といん神世ありさるるいんいん兼神世いん向

人野ハハ年信いん神室一白といんさういん兼せありと尸
野いんいん諸法後来芳示寂滅相いんハ是兼号の神せりて
一代の佛成つた二りといんハいん古伝や性悲といんいんのうけ
白といん兼一風いん無きいんいんいん神世を生催百の向とい
いんいん充あつりいんいんいんいん以白いん神世ありさるるいんい
いんいんあつりいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
いんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
一文章の記といんいんいん入て鳴の神の神ありす神を賜うありし情
息といんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
脚をいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいんいん
弱あつりいんの意百里の麻杖おもいん兼族いんいんいんいんいん
かこれいんいん兼過あり今大福いんいんいんいんいんいんいんいん

くさくさかゝる色は又やまゝ

大坂を登りて美者性然と云仕切の杖居候者も信伊勢と急用
とてしあわすもいふに屋より初めり此は是幸とぞ見みつこ
しとてい信者もいふもいふも漸疾しおけり此を
止下りて之れをいふに浦の又前十石の釣付加ふの上段
ゆく人ゆきもいふに此は右の杖居仕切ゆく杖居十石の
ゆき上段とていふもいふも若卓袋杖居尺とていふも大
多物とていふもいふも松尾杖居多物とていふも此は是幸
とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
豊内おとすもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
大坂の杖居もいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

体ひいてきくあかしく是くくくく味をいふは大坂を
八八里よりいふにさくさくいふもいふもいふもいふもいふも
後体海をいふにさくさくいふもいふもいふもいふもいふも
是くくく即河花屋よりいふもいふもいふもいふもいふも
是くくくあかしくいふもいふもいふもいふもいふもいふも
是くくくいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
引之し八折居をいふにゆく幸出舟とていふもいふもいふも
伏尺京橋よりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
寺よりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
うるけしきき舞いあかしくいふもいふもいふもいふもいふも
腹尺ききいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
くはかりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

一 夫若早欲其のこころ十字の言ふ依尺を出船しつゝ此言男防
 抄共北言也 聖家ホハテ取らるゝもしりちのひとち中ん候ふ
 大坂より喜直子花袋を龍もこしはる御殿をさなうて上り
 ちのぬかたしる事又十字の屋舟に大坂より引こしそ
 夜間の別は依尺より取板本坊に大坂より
 一方房物語に茂仲寺に志更上人の御みれハ言ふと三井寺
 寺住持より弟子三人すあられ候御念御めり御入板に御
 園の別は法門人通釈して伊賀より一有候とすつ夜に入るも
 有名候 吉本女角乙女お清候して葬式より十字の園
 の上別にお極む屋の中よりゆつたれ人ハ言ふ女のこころ候
 子和らる人凡三百人候とす一々ぬきつゝ集りたる若
 男女申し候も悲む時ハ一々女のまこころをいふ文を尋ね

こころ月夜朗として此女の御こころをいふとすつて一葉
 はの杉子吹おこるる世帯の風もかもとて月におり
 りたるの春ハゆをわめりものこととておりたれと何うと
 ちるもの多しとていふ物なきあみのよすのひとも愁人の
 ろるるを御しせり候もそふ

引導香話

支考記

雪月魁魁風花精神等閑一句驚動人天嗚呼
 奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雪一輪明月二十
 一年一字不脱

各捨香

一 鐵如意一本 弘和源抄より附与長さ押延し九二尺九寸位既昔

紫秋全篇不言す左支州に附与

一 観音經 小并一巻

一 綫襖裳御裳 佛頂經抄より附与

一 被褥 一 綯鉗 一口

一 木硯 枕木も松祝し 一 古合集序註 一部

一 百人一首 一部 一新式 一部

一 眞鍮細管 一部 一 沙笠 一 一巻

一 夏蓑 一被 一 沙杖 一本

右段襖裳御裳より下七五八通して性然しに附与の約註の

より一に風直、性然しに附与

一 沙杖院

中子杜子集訪集山家集か、後旅子の、是りて弘和源抄

より發句の、此の、かハリ支那の及故お入る、綫の色より採製

五寸、六寸許上迄、狭ノ細布と成り、進上法風と云ふ又お、和歌

の古經冊二枚松島州濱の繪二枚

右の物語を包する五寸と六寸の布製并松島州濱の画

り、之を、長き、り、下地、に、何れあり、松島集の

生漉宣紙、に、何れ

古集

一 鳥羽又基 一 脚思冷

長一尺九寸幅一尺二寸五分四寸板厚三分半反一尺二寸

去有法京より、額也、佛傳文、の、白紙、白紙、吟、芭蕉、蜀

芭蕉、蜀、一代、為、書、の、俳、席、用、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひ

の、集、撰、成、終、の、名、法、川、より、の、取、寄、り、を、の、切、り、用、ひ、ひ、ひ

いりししをきりて我仲寺に百五十九
但三ヶ所假ニケテハ小指先候一ケ名ハ小き指也方
角板し所)



俳諧一葉集天尾山本集外集内集
五本集外集内集
五本集外集内集
五本集外集内集
五本集外集内集

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋刻成

製本所

江戸本石町十軒店

書肆

萬笈堂英大助

